

## 小説教材の物語分析

—— 高等専門学校における実践から ——

はじめに

小説教材の扱い方については、主人公の心理に焦点を当てるような従来の授業に対するさまざまな批判<sup>〔1〕</sup>があり、「小説の構造」や「語り」に着眼した授業を指向する方法など、多様な方法論<sup>〔2〕</sup>が探られている。それらの動きはそれぞれ魅力的だが、ここでは「物語」に焦点を当てた「読み」の提案を試みたい。それは、小説を分析し内在する物語を析出してゆくことで物語の力学を明らかにし、そこからいかに小説を読みうるのかを考える授業である。

そして、この提案は、筆者が勤務する高等専門学校で実際に行った授業をもとにしている。高等専門学校は、中学校の卒業生を受け入れ、五年間の一貫教育で

主として技術者を育成する、高等教育機関である。ただ、当然高等学校年代の学生もいるため、「一般科目」と呼ばれる科目のうち文系科目では、低学年において高等学校の検定教科書を使用する場合も多い。筆者の勤務する松江工業高等専門学校（以下、松江高専）でも、二年生までは国語の検定教科書を使用して授業を行っている。

高等専門学校の多くは、一コマ九〇分の授業時間である。松江高専では、一コマを一五週行い、それに期末試験を加えて一単位としている。そして、松江高専の国語の授業では、三年生の後期に、文庫本を一冊読み切る「文庫本購読」を行うことを伝統としてきた。筆者自身もこの授業で、安部公房の初期短編や池澤夏樹の作品を教材として取りあげた。そのうち、本稿で

山 根 繁 樹

は、池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』を題材とした授業から、物語に焦点を当てて小説を読む試みについて述べてみたい。

## 一 物語と小説の関わり

そもそも、ここでいう「物語」がいかなるものかを確認しておこう。まずは、蓮實重彦・柄谷行人『闘争のエチカ』<sup>1)</sup>における、それぞれの発言から引用する。

〈蓮實〉さっき、書物は流通しない、差異として反復されるしかないといったけれど、小説というものも流通しないんです。物語のほうは、無限に流通して行きます。差異としてではなく、類似のヴァリアントとして反復される。それは、相対的な差異のイメージとして流通するというこの意味でしよう。だから、小説を読むことと物語を読むことは、まったく別の体験になる。しかし、その別種の体験が、最後まで別のものだったら、小説がこれほど読まれることはないだろう。

〈柄谷〉▼(略)この前もいったけれども、小説というのには「物が在る」という出来事にかかわると思っています。それまでは、「物が在る」にもかかわらず、それを物語や構造に解消できた。あるいはできると考えられた。しかし構造に解消できないようなかたちで「物が在る」。小説の小説性とい

うのは、「物が在る」という事実の、どうにもならないこと、そのことだと思っんです。(傍点原文)

蓮實は、物語は〈無限に流通〉していくとし、〈小説を読むことと物語を読むこと〉という実は〈別の体験〉が重なりを持つところに、「読まれるもの」としての小説の運命を見いだしている。一方、柄谷は、小説の〈小説性〉が、〈物語や構造〉に〈解消できない〉ことにあるのだとする。

ここでいう物語とは、いわゆる「物語文学」といったものを指していない。それは、我々の認識そのものにおいて働いている、ある種のパターンのようなものではないか。たとえば、ある存在を目にして「郵便配達員」と認識するとしよう。その認識は、抽象的な「郵便配達員」という概念に充填される属性(たとえば「家々に郵便物を配達する」、「赤い乗り物で移動する」といった属性)の束を理解していることによって生まれる。ここでいう「属性の束」が物語である。ある概念を理解するには、その概念が抱え持つ物語を理解することが必要なのである。だとすれば、物語は〈無限に流通〉している。

また、たとえば「増水した川に子どもが流された」といったニュースを聞いて、「またか」とか「最近こういうニュースが多いな」とか思ったとすれば、その場合にも、パターンとしてのある種の物語を読み取っ

ているといえるだろう。しかし、もし自分の子どもがその当事者だとすれば、「またか」と思う者がいるとは考えにくい。つまり、自分自身に起こっているその〈出来事〉は、物語に〈解消できない〉のである。

このように考えれば、物語は、我々の言語を伴った社会生活を根本で支えているということが出来る。認識レベルにおいて、実は差異に満ちた事物を一つの概念で同種のものとして認識することはもちろん、我々自身は「教員物語」や「夫婦物語」のパターンをなぞって生きてもいる。物語は、さまざまな対象を類型化して概念として捉えさせたり出来事の一回国性という衝撃をパターン化によってやわらげたりすることで、我々の生きる世界を安定化させているともいえる。だからこそ、柄谷は次のようにいう。

〈柄谷 ▼(略) 物語の出自ははっきりしています。というより、あるものの出自(アイデンティティ)をはっきりさせるのが物語だからです。物語は共同体の構造そのものです。〉

ここまで見てきた『闘争のエチカ』における蓮實重彦・柄谷行人の言葉は、奥泉光・いとうせいこうという二人の小説家の対話においても、時と場所を変えて変奏されている。『文芸漫談』<sup>3)</sup>から引用する。

〈奥泉 現実を生きる限り、人はなんらかの物語に閉じ込められて生きざるをえない、ということはありませんよ。それは、「ので」でつなげられる

物語の世界を生きている、ということだと。いとう うん。

奥泉 だけど、それが世界のすべてではない、と言いつける。物語の世界に亀裂が入ったときにはじめて垣間見える世界もある。〉

〈奥泉 この対話で繰り返されたように、小説は物語と深くかかわってはいるけれど、それ自体として物語ではないと考え、物語に亀裂を与えるものだと。

いとう とすると、「リアリティ」とはそういう亀裂、意味に回収されない世界のことですか?〉

いとうのいう「リアリティ」が、柄谷のいう「物が在る」という出来事」と重なり合うことは明らかであろう。また、我々の生きる現実が〈物語に閉じ込められ〉ているという奥泉の言葉は、先に見た、物語による世界の安定化を言い換えるものになっているといえる。一方、奥泉のいう「ので」でつなげられる物語」とは、小説が書けなくなったようにいつて語り合う、次のような対話を受けての言葉である。

〈奥泉 いとうさんは、物語を拒否しているんですよ。「コップが落ちたので割れました」というのは、物語なんです。単一の時間軸に沿った出来事の連鎖ですから。物語とはその連鎖を引き起こす「ので」のことであり、それがダメだということ、は、物語を受けつけない体になってしまっている。

いとう だけど、小説は物語がないとやっつけていけないでしょ。詩じゃないんだから。「コップが落ちた。割れた」って、「カエル帰る―草野心平」と書いてあっても、それは小説ではない。草野心平はおもしろいけれど、それはおもしろくない。いわゆるストーリーとしての「物語」以前に、われわれは「コップが落ちた」ので「割れた」という物語に、呪縛されているんですね。その呪縛なしでは生きていけない。

奥泉 「現実」がそういう物語的な構成になっ  
ている。

ここにある（小説は物語がないとやっつけていけない）という言葉は、蓮實のいう（別種の体験が、最後まで別のものだったら、小説がこれほど読まれることはない）という小説と物語の関わりを、小説家として言い換えたものになっていよう。そして、ここでは、小説が（出来事の連鎖）や（その連鎖を引き起こす）ものとしての物語を必須としていると表明される。つまり、小説における物語のプロットの必要性が確認されるのである。また、いとうせいこうの発言を批判的に考察すれば、「詩」は、認識に関わる記述の束としての、ある意味潜在的な物語からズレ、「小説」は、時間軸を持った、より長い物語からズレると、乱暴にまとめられるかもしれない。

以上のことをふまえ、本稿でいう「物語」とは、小

説における、出来事の連鎖としてのストーリー、因果関係としてのプロットをいう。それは、小説の中で成り立っている世界の仕組み、ということもできる。そして、それが小説でいかに働き、いかなる力を発揮しているかを、学習者とともに確認した過程と、小説が抱え込むという（亀裂）についての考察を述べてみたい。

なお、実際の授業においても、「物語」という言葉が何を意味するかについて話している。ただし、ここに挙げたような文献を示しての解説は行っていない。授業では、テレビドラマ「水戸黄門」を例に、繰り返しされるパターンとしての物語について語り（この例は早晚同じなくなると思われるが）、学習者が知るドラマやアニメ、ゲームについて、その物語（パターン）を抽出する。加えて、数人の登場人物とその簡単な属性を示し、自ら物語構築を試みさせる（多くの場合似たパターンが使われる）。また、学習者達自身が内包されている「松江高専生」物語の典型を考えさせることもある。それは、物語からこぼれ落ちる、自身の「リアル」についての考察となる可能性を秘めてもいるはずである。

## 二 『マシマス・ギリの失脚』における物語

それでは、授業において『マシマス・ギリの失脚』<sup>6</sup>

の物語分析を進める過程を示してみよう。授業では、全部で九章に分けられる小説の各章について、用意した「あらすじノート」の穴埋めをすることであらずじを作成する作業を行う。したがって、学習者は、授業に入る前に該当する章を読み進めておかなければ作業に入れない。「あらすじノート」は、各章につきB5で四、五頁程度、小説本文からポイントとなる文章を抜き出してつなぎ合わせ、その中のいくつかの言葉を穴埋め用に空欄にしたものである。学習者は、読み進めてきた小説のあらすじを穴埋め作業によって確認しつつ、小説内の出来事の連鎖を辿り始める。授業では、各章の穴埋め作業後、それぞれの章について出来事とその因果関係を、質疑をとおして考察していく。

具体的な『マシアス・ギリの失脚』分析の詳細については、既に拙稿<sup>8)</sup>で示しているのでそちらに譲り、ここでは、分析結果に基づいた授業の展開について述べることにする。ただし、拙稿の冒頭部分で示した『マシアス・ギリの失脚』における物語の大枠についての見解を引用しておく。

〔池澤夏樹の『マシアス・ギリの失脚』は、その名のとおり、ナビタード民主共和国大統領マシアス・ギリが大統領職から失脚する物語である。物語は、次のようにして語り始められる。〕

《朝から話をはじめよう。すべてよき物語は朝の薄明の中から出現するものだから。》

そして、物語冒頭には、街中に貼られたビラに書かれているものとして、次の言葉が仕掛けられている。

《大地は汝を受け止めるであろう》

物語の最終段階に至ると、この言葉は、マシアス・ギリが飛行機から島に飛び降り自殺することによって《成就》される。

《大地は汝を受け止めるであろう、という言葉はかくして成就された。》

この物語において、ビラの言葉は、マシアス・ギリの死を予言する言葉となっている。「予言」として機能することは、ビラの言葉が、物語のプロットを超えて物語の行き先を示している、ということを意味する。逆にいえば、物語は、ビラの言葉が「予言」となるように展開されるのである。

では、そのビラを貼ったのは誰か。この物語において、その「誰か」が判明することはない。つまり、物語内容のレベルにありながら、この物語自体のプロットを支配しているビラの言葉は、無名の何者かによって発せられているのである。マシアス・ギリを中心に据えた物語は、実は、同じ物語内部にいるはずの、名前を明かされない者の言葉を実現する物語なのである。〕

ここでも引いたこの物語の語り始めの言葉は、この物語を閉じる言葉と響きあい、語り手について重要な情報をもたらすとともに、「語ること」についての仕掛けともなっている。授業では、すべての作業を終えた最終段階で学習者とともに、「語り手」について考えるのだが、ここでも授業と同じように、そのことについては後で触れることとする。

さて、マシアスと対峙する何者かの存在は、物語内でマシアスの周りで起こる、さまざまに厄介な出来事によって示唆される。意味不明なビラの言葉、日本統治時代に建てられた鳥居が倒されたこと、日本からの慰霊団歓迎式典における日の丸の炎上、などがそれぞれある。学習者は、これらの出来事を辿りながら、それぞれの出来事が持つ意味を謎として受け取り、その謎を仕掛けたまだ見ぬ何者かの存在をぼんやりと想定することになる。六〇〇頁を超える分量の文庫本を読み進めている段階の学習者にとっては、先の拙稿のように、物語全体を俯瞰して〈予言〉を見出す、といったことは難しいからである。

しかし、学習者が想定するマシアスの敵対者は、なかなかその姿を現さない。なぜなら、先の「大枠」で述べたとおり、マシアスに対峙するのは、物語内で固有名名を与えられることのない無名の者たちだからである。

その一方で、物語内には、さまざまな名前へのこた

わりが見られる。マシアスに限っても、毎朝自分の名前を百回唱えて大統領になりきる儀式を行っていること、母親の遺品にあった名刺を自分の父親の名と信じていること、マリア・ギリと結婚してマシアス・ギリとなる以前の姓が明かされないこと、などである。そして、名前にまつわる語りの多さから、逆に、物語が進行しても決して名前を明かされない者たちの存在が浮かび上がってくることになる。物語が進むと、マシアスに対峙する具体的な存在として、大巫女ノ頭、大巫女たち、長老会議の面々、噂を練り広げて議論する広場に集まった人々ら、この島の伝統的な共同性に根ざして生きる人たちが登場する。そして、その人々は、外国人を除く全国民とも重なっていて、政治に携わる数名を除いて、誰も固有名が示されない。それによって徐々に、大統領マシアス・ギリ対無名の者たちの共同性という構図が読み取られるのである。

加えて、この小説には、物語の展開を暗示する物語内物語が仕掛けられている。第三章にある、ナビダールの精神的支柱とされるメルチョール島で、広場に集まった子供たちに老人が語る物語がそれである。それは次のようなものだ。豊かで周囲から尊敬も集める幸福なこの島で、珊瑚礁の内側に怪しい大魚が住みつき、島をかじり始めた。その大魚を退治するため、賢い娘が策を練り七人の弟がそれを実行していく。大魚は手強くなかなかうまくいかないが、最後は娘の指示によ



り七人の弟が手に入れた薬で大魚を退治する。そのとき大魚は、「ありがとう」といつて死んでいく。そして老人は、子供たちに「そういう特別に賢い娘がどんな時でも鳥の危機を救うのだと教えるのである。これは、マシアスの物語において、〈メルチョール出身の若い女〉とその〈七人の弟と従弟たち〉が、マシアスの犯した罪を暴き、結果として、マシアスが誘致しようとしていた、環礁内にタンカーを並べる日本の石油備蓄基地計画を阻止したこと、そして、マシアスの最期の言葉が「ありがとう」であることと符合する。この他にも、娘が結婚しないこと、七人が決定的な仕事をするとき娘たちの相手をする事など、細かい一致点と少しのズレがいくつも見られるのである。

学習者が第三章の物語内物語を読んだ時点で、さまざま物語全体の展開を暗示するものだと気づくことは少ない。だが、それまでのところで出てきた、マシアスの周りで起こる厄介な出来事にまつわる噂として出てくる〈七人の若者〉や、マシアスが愛人であるアンジェリーナに任せている店で見かけた〈メルチョール出身の若い女〉といった言葉に注意を向けさせておくことはできる。それにより、マシアスが石油備蓄計画の現場である珊瑚礁に娘を連れて行く第四章、あるいは、娘が〈弟が三人いる。それに従弟が四人〉とマシアスに告げる第五章に入った段階で、娘と七人の若者がマシアスの計画を阻止しようとするのではないかと

読み、そのように発言する者が出てくることもある。また、そうならない場合でも、マシアスが自殺する第九章に至って、物語内物語の暗示性に気づく、あるいは気づいた者に教えられて物語のパターンを認識する、ということが起こるのである。

マシアスの物語は、先に示したとおり、大統領マシアス・ギリと無名の共同性が争い、無名の共同性側が勝利する、というものである。ただし、それは、マシアスが無名の共同性の中にある自身の存在を自覚した結果として実現される「勝利」である。マシアスが「ギリ」姓を得る前の姓は、物語中では明かされないものであり、そのことが、「大統領マシアス・ギリ」として生きるだけでなく、「無名のナビゲード人」としても生き、そのことを自覚する物語の展開を保証している。

このように理解が進んだ段階で、学習者には一つの疑問が浮かぶ。あるいは、質疑によって考察を促す。その疑問とは、無名の共同性側から来た、マシアスにとって最大の敵対者となる〈メルチョール出身の若い女〉になぜ名前があるのか、というものである。実際、彼女は、〈マリア〉という名前前で物語内に現れ、その後〈エメリアナ〉という名を得ている。これに答えるのは学習者にとつて容易ではないが、〈エメリアナ〉という名が与えられる場面での彼女の言葉〈新しい仕事には新しい名前〉をヒントとし、〈マリア〉

〈エメリアナ〉がそれぞれ誰の名前と同じかに気づけば、次のような結論に至るだろう。先に示した拙稿から引用しておく。

〔まず、「マリア」という名がマリア・ギリのものであることを忘れるべきではない。当初マシアスは、この女性を大統領の職務のために官邸に呼んだのであり、マシアスの仕事を支えるべき女性として選ばれる者の名前は、マシアスの成功を支えてくれたマリア・ギリの「マリア」でなければならなかった。そして、ここで《母の名》の「エメリアナ」が与えられることは、物語の終わりに彼女がマシアスの子を身ごもり、母となるであろうことと符合している。それは、そのような《流れ》の優位性を語る物語が要請する、必然であるといえる。〕

このような細部を確認することができれば、学習者の物語把握は確実なものになる。

### 三 物語に収まらないものの把握

物語の把握ができた時点で、学習者には、小説内のどの要素が物語内に収まり、どの要素がそこからほれ落ちるのかについて考察を促す。そこで最初に挙げるのが、〈バス・リポート〉である。〈バス・リポート〉とは、日本からの慰霊団を乗せたバスが行方不明

になるといふ事件が起こった後、第三章から第八章まで計一二回、小説中に挿入される、バスにまつわる摩訶不思議な話の数々である。それは、誰が誰に向けて〈リポート〉しているのか不明であり、物語全体との関わりも明らかではない。慰霊団のバス失踪事件自体は、物語内で、無名の共同性に連なる〈力〉の仕業だと明かされているが、だからといって〈バス・リポート〉の報告者が無名の共同性側の何者かとして想定できるわけでもない。ただし、〈バス・リポート〉の摩訶不思議さと、バスが帰還したとき挨拶に立った日本人の言葉〈実に愉快で、のびのびとした、私個人としては生涯で最も楽しい日々であった〉は呼応しているといえる。だとすれば、誰が誰に向けた〈リポート〉であったとしても、物語に対しては、無名の共同性の持つ摩訶不思議な力を裏付けるものになっているといえよう。学習者の中には、誰が誰に向けて〈リポート〉しているのが不明なことが、「無名の者たち」の語りであることを示すのではないかと考える者もいる。しかし、物語内では、無名の者たちとして在る広場に集まった人々が、さまざまにバスの噂をしており、バスの心配は必要ないと言ったり、ドイツ統治時代のドイツ人大量失踪事件との類似を指摘したりし、ドイツ人たちは〈よくわからないままに愉快な日々を送ったという〉とまで話している。つまり、〈バス・リポート〉が無名の者たち同士の報告である、という蓋然性



は低い。また、これは、正体不明の（リポート）が「1」から「最後の」という形で小説に組み込まれているという問題であり、マシアスの物語の語り手との関わりも考えるべき点となっている。

最終的に（バス・リポート）は、その内容においてマシアスの物語を補完しつつ、語りにおいてマシアスのいる現実レベルとは別の摩訶不思議な現実を語るための手段と考えることができる。ただし、そこで語られたバスの力、すなわち、日本人たちに（愉快な日々）を過ごさせ、帰還の挨拶の中で戦中戦後のふるまいについて（ずいぶん深い反省の念をこのバスの中の日々でいただきました）と語らせる力は、必ずしもマシアスの物語に収まりきっているとはいえない。なぜなら、名前の明かされないこの日本人が、いかにして（反省）を得たのか、それはこの島以外の人間にも無名の共同性の力と通じるものがあることを示すのか、といった点が不明のまま残されるからである。

そのように考えたとき、この小説で無名の共同性が勝利する物語からこぼれ落ちる最大の要素が、この島に生活の基盤をおいてマシアスに関わりながら生きてきた、外国出身の女性たちにあることに気づく。物語は、マシアスの自死により、（大地は汝を受けとめるであろう）という言葉が（成就された）時点で完結している。無名の人々にとってこの物語は自明だ。だから、その後には小説中に現れるのは、マシアスが残した

手紙と、マシアスに関わった外国出身の女性たちの姿、つまり、物語においてマシアス自身によって（もういい）とされた日常的現実のその後、ということになる。だが、この後日談は、読者にとって小説の締め括りに当たる部分であり、決して（もういい）と打ち捨てておけるものではない。

そして、ここでは、それまで物語内で交わることになかった二人の外国出身女性、アンジェリーナとイツコが初めて会話を交わすのでもある。アンジェリーナはマシアスの愛人で娼館の共同経営者、イツコはマシアスが日本から連れてきたいわば家政婦で、大統領官邸の日本風（内陣）つまりマシアスの生活を支えてきた人物である。アンジェリーナはマシアスが犯した罪の隠蔽に加担した共犯者でもあり、イツコはマシアスの罪を暴くため大統領官邸に入り込んだ（メルチョール出身の若い女）に、最終的には手を貸してやった。それぞれマシアスとは深く関わった女性たちである。その二人が小説の最後に会い、イツコがアンジェリーナの娼館で家事仕事をすることになるのだが、二人はそれぞれに別々のマシアスの思い出を抱えており、それぞれが悲しみに沈んでもいる。学習者は、マシアスの前でほとんど感情を表すことのなかったイツコの（お墓に近いところにいたい）という言葉、意外にも思い、また、初めて明かされたイツコの内心として重くも受け止める。そして、イツコの言葉を聞いて

〈それを言わないで〉と心の中で思うアンジェリーナについても、深い悲しみの中にあることを理解するのである。

だが、それは、無名の共同性がマシアスをへ回収する形で勝利する物語にとってはノイズである。マシアス自身が、「マシアス・ギリ」という名を背負うことで得た個としての存在を、無名のナビゲード人として見切ったのだ。だから、マシアス個人の死を悲しむことは、物語には収まりきれないのだといわざるを得ない。しかし、学習者にとっては、二人の悲しみこそが「リアル」である。それが、それぞれが抱く別々の悲しみだとわかるからこそ、余計に「リアルさ」が増しているともいえる。つまり、ここに小説が抱える物語の〈亀裂〉がある。

そして、そのことは、学習者自身の読書体験を振り返るきっかけともなる。なぜなら、授業が進むにつれて学習者たちは、「マシアスどこまで読んだ？」とか、「次の章、マシアスやばいよ」とかいった形で、小説自体や主人公にそれぞれの思い入れを持ち始めていたからである。つまり、包み込まれていた共同性の力に気づき、個としての存在を解消するマシアスとそれを語る物語よりも、それぞれにマシアスへの思い入れを持ちながら悲しみに沈む二人の女性の方が、学習者にとっては近く感じられるのであろう。物語とそこからこぼれ落ちる「リアルさ」との落差に気がつくことができれば、小説は充分に読めたと評価できるのではな

いだろうか。

また、学習者たちが、「マシアス・ギリ」という架空の固有名詞を戴く小説のタイトルに思い至ったとき、無名の共同性が個としての存在を飲み込むことで勝利する物語に対し、小説はあくまでも「リアルさ」の側に加担しようとしていることに気づくことができるのかもしれない。

ここで、語り手の問題について述べておく。先にふれたように、小説は、次の一行で始まる。

〈朝から話をはじめよう。すべてよき物語は朝の薄明の中から出現するものだから。〉

そして、小説は、次の会話で閉じられる。

〈「どうだ、もう一度最初からはじめないか？ すべてよき物語は明けがたの薄明の中から立ち現れるものだ、という一番はじめのところから」

「いいよ。時間はいくらでもあるんだから」と軽く言って、ケッチは二人のグラスにたつぷりと酒を注いだ。〉

ここでは、重要な登場人物でもあったケッチとヨールの二人組が語り手だったと明かされ、しかも、語り自体を反復する意思が語られている。これによって語りが循環していくように思う学習者もいないではないが、〈ケッチは〉〈酒を注いだ。〉と語る語り手と、会話をしながら酒を飲む二人が完全に重なるものではないことは、はっきりしている。むしろ、学習者は、読んできた小説の豊穡さを生み出すのが「語り」であるこ

とに改めて気づかされる。二人は、まさに「語る」とについて「語り合う」のであり、「語り」の自在さこそが強調されているからである。(バス・リポート)についても、ケッチとヨールの語りに含まれると考えれば、二人が物語の「聞き手」に向けて(リポート)するのだ、といえるだろう。

おわりに

以上、小説において物語に着目し、物語を読み解くことから小説を読む学習について述べてきた。長編小説を時間をかけて読むことから、実践例としては、特殊なものに見えるかもしれない。だが、方法論は応用可能である。因果関係の連鎖を読み解き、それに付随するもの、そこから漏れるものを識別していくことによって、物語の膨らみとそこに収まらない過剰なものを読み取ることがはできるはずである。また、完結しない、物語の端緒を、数多く含み込んだ小説もある。その場合、完結しないこと自体が意味を生じていると考えることもできる。そのような例については、稿を改めて述べてみたい。

最後に。高等専門学校においても、予算や人員の削減による「効率化」が求められている。そのため、長らく続いてきた松江高専の文庫本購読も、いつまで続けられるかは不明である。ただ、「すぐに役立つ」知識や言語技術を身につけさせることだけが重要ではな

いはずだ。言葉で語られる世界を読み解き、自分たちを取り巻く物語に気づき、自身にとってリアルな現実をふまえて言葉を発する、そのような力は、今ますます必要になっていくように思うのである。

注

(1) たとえば、亀井秀雄は、自身が監修した『超入門！ 現代文学理論講座』(蓼沼正美著、筑摩書房、二〇一五年一〇月)において、往時を振り返り次のように述べる。

「ずいぶん長い間、日本の国語教科書では、物語や小説を読んだのちに、「主人公の気持ちがどのように変わっていったか、整理してみよう。」と問いかける。そういう傾向が続いてきた。さらにもう一つ、「作者はこの作品を通して何を訴えたかったのか、考えてみよう。」とか、「作者がこの作品を書いたころの生活を調べてみよう。」とかいう課題が載っていた。」

そして、同書で蓼沼正美は、「作品の読みは、自ずと作者に還元されることで成り立つ」という立場を批判し、いくつかの文学理論を元にした「読み」を具体的に提示している。

(2) たとえば、全国大学国語教育学会編『国語科教育実践・研究必携』(学芸図書、二〇〇九年五月)において、「読むことの学習指導の展開」のうち

「中学校・高等学校／文学」の項には（文学教育の方法論）として、「人物の心情を読む」「文章表現を読む」「小説の構造・語りの構造を読む」「ディベート、一行詩、読書へのアニメーション」などが挙げられている。

(3) 二〇一五年度現在、松江高専では「国語」ではなく「日本語」という名称を用いているが、ここでも取りあげる実践は名称改変以前から続いている。ここでは提案としての本稿の意図を明示すべく「国語」としている。

(4) 河出書房新社、一九八八年五月。引用は、河出文庫（一九九四年二月）に拠る。

(5) いとうせいこう・奥泉光・渡部直己『文芸漫談』（集英社、二〇〇五年七月）。引用同じ。

(6) 池澤夏樹『マシマス・ギリの失脚』新潮社、一九九三年六月。文庫版は、新潮文庫、一九九六年六月。引用は文庫版に拠る。

(7) ただし、文庫本を讀破してから授業に臨む者は、ほほいしない。学習者のほとんどは、あらずじの作業ができるギリギリの分量を讀んだ状態で授業に臨んでいる。したがって、授業は、それら多数の学習者を前提に進められる。

(8) 山根繁樹「池澤夏樹『マシマス・ギリの失脚』論―名前の物語の行方―」（『近代文学試論』第一号、二〇〇三年一二月）。

（松江工業高等専門学校教授）